

ディスカッション

司会（鈴木） 私からお二人に問いかけをしながら進めていきたいと思います。それぞれ重なる内容のご報告をいただきましたので、ご報告の趣旨を確認して相互の関連を明らかにする意味で、それぞれのご報告についてどのような印象を持たれたか、どのような点が重要だとお感じになられたのかについて、まず、おうかがいしたいと思います。筒井さんから、いかがでしょうか。

筒井 はい。佐々木さん、ご報告ありがとうございます。私が佐々木さんの報告で一番揺さぶられたのは、A さんの手書きの日報です。ビフォー・アンド・アフターと言うのでしょうか、訓練に参加するようになってこんなにメッセージが変わるのか。字はそんなにたくさんは書いてないですけども、自信がついたぞという思いが行間に溢れているように見えました。私のみならず、このシンポジウムに参加した人は、佐々木さんがなさっている実践がどれだけ力強いものなのか、人間が学習をして発達していくことの Witness、証人になられたのではないのでしょうか。それは今日のシンポジウムの貴重な財産ではないかと思います。

司会 それでは同じ質問を佐々木さんにもしたいと思います。筒井さんのコメントについての感想でも結構です。

佐々木 筒井さん、コメントありがとうございます。私たちも A さんと一緒に Reskilling をさせてもらっていて、気付かされることが本当に多いです。それをお互い確認しあえるということが、A さんにとっても喜びなんだろうと思います。ともに喜び、ともに悲しむ、現場で一緒にやっているからこそ見えてくる私たちの実践です。

また、筒井さんのご報告のなかにも、たくさんヒントがありました。たとえば A 高校の方々の、一見、元気でハキハキしているが、仕事に入ると、できないことやわからないことに直面して壁にぶつかるなど。私たちも現場のなかでしょっちゅう起こることで、でも一緒に働いているからこそそれが見えてくるし、一緒に壁を乗り越えていくことができます。こういったことは履歴書といった書類だけでは絶対に見えないということを、筒井さんの報告から学ばせていただきました。

もうひとつ、私が筒井さんの報告で再確認したのは歯車の図です。この歯車の図は私のなかでストンと腑に落ちました。何のための Reskilling / Upskilling なのか。Reskilling / Upskilling の歯車を回すのは、それは人間の発達に寄与するからであって、経済成長はその後からついてくるものと捉えました。つまり人間が発達するところに経済成長が続いてくる。逆に、経済優先で考えたり、歯車のそれぞれが単独に回るだけでは、かみ合わないし、全体としての威力を発揮することはできないということが、あの図でとてもよくわかりました。

このことは私の報告の最後で触れた「縦の循環」にも同じことがいえると思います。たとえば国、自治体、民間、当事者の協同で一緒にやっていくのですが、これもうまくかみ合わない、本

当に何の力も発揮できない。せつかく国の制度があるのに、自治体が手を挙げなければ、絵に描いた餅で終わってしまいます。もちろん、制度があつて、自治体が手を挙げて、なかなかうまく民間との協働ができないということが実際的には起こるのですが、私たちの活動地域である豊中は、国、自治体、民間、当事者という、この「縦の循環」がうまくかみ合っている地域ではないかと思ひます。そのベースにあるのは何かと考えると、それぞれの主体の間にある信頼関係だと思ひます。信頼関係がなければ「縦の循環」は成立しない、歯車も回らないということ、あの歯車の図から再確認しました。

司会 ILOはソーシャル・ダイアログ、社会対話をとても重視して、今日のシンポジウムでもたびたび出てきましたけれども、佐々木さんの現場の実践のなかでも、各主体の間の信頼関係、対話の重要性が、よく伝わってまいりました。

次の質問ですが、今日のシンポジウムでは、まずレディーさんの基調講演があり、それからILO総会出席者に政労使のお立場からコメントを頂戴しました。基調講演と政労使のコメントを受けまして、あらためて考えたこと、感じたことがございましたら、それぞれお聞かせいただけますでしょうか。筒井さんからお願いします。

筒井 ふたつ申し上げたいと思ひます。ひとつ目は基調講演、最初のレディーさんのお話に関してです。率直に申し上げて、非常に典型的な国際機関の文書だなという印象を受けました。つまり、いろいろな立場の人、いろいろな利害関心を持った人たち、国や地域も多様な人たちが集まっている場です。そうした人々が一緒に集まって何かひとつのことに向けて合意形成していくなかで宣言文書を作ると、このような網羅的と言ひますか、リッチと言ひますか、そういった文書になるんだなと。つまり、焦点はどこにあるのか、あまりにリッチなのでわかりにくいのです。そういった文書であるという理解のもとに、気をつけて聞いたり読んだりする必要があると思ひます。

それゆえ人によって何が大事と思ひたか、受け止め方が違ってくることもあろうかと思ひます。私の受け止め方としては、やはりILOの立場として、誰にフォーカスを当てているかでいえば、いろいろな言及はありましたが、やはりvulnerableな人々、不利な状況にある人々は外せない、そこがILOの根幹であるというの、すごく伝わってきました。レディーさんの話のなかでは、such asとして、女性や若者やインフォーマルセクターで働いている人々や難民という例が出てきました。私たちがそれを聞くと「途上国の話ね」と思ひがちですが、決してそんなことはなくて、先進国のなかでも、まさに私たちの問題として、女性、若者、難民、インフォーマルセクターで働いている人々、そういった人々を具体的に思ひ浮かべながら、政策を作っていかなければならないのだなと思ひます。これが最初のレディーさんのご報告を聞いて考えさせられたことです。

それからもうひとつ、政労使の三者の皆さまからのお話のなかでは、デジタルトランスフォーメーションの話をお皆さんされていることが印象に残りました。また連合の郷野さんのお話では、「公正な移行」が強調されていました。とくにvulnerableな人々にとってのスキル形成を、どう国として引き受けていくのか。デジタルトランスフォーメーションを含めた変化のなかにあつて、なおさら取り残されてbehindになっていく人々がいる、女性はとくにそうではないかというお話がありました。その格差やギャップをどう埋めていくかが課題だと思ひます。佐々木さんが実践しておられる訓練に参加している人々の様子、デジタルトランスフォーメーションというの、もの

ディスカッションの様子



筒井美紀氏

佐々木妙月氏

司会 (鈴木宗徳)

すごく距離があって、そこをどうやって縮めていくのか。そういったことを考えたときに、これは本気の社会的投資が必要になると、あらためて感じさせられました。少しずつ上がって行けるキャリアのハシゴをどう掛けていくのか。そのためには、緻密な、そして大胆な設計がないと、とてもじゃないけどもできない。no one left behind と言いながら、結局は left behind になっているという状況になりやしないか。課題の重たさや深刻さを認識させられました。

司会 われわれを取り巻く環境は本当に厳しいと思います。コロナが原因というだけではなく、コロナ以前からの社会の構造から生まれてくる問題がものすごく大きいですね。それでは同じ質問を、佐々木さんの立場からお願いします。

佐々木 レディーさんの基調講演は、ILO からの心強いメッセージが込められていたと思いました。コロナからの人間を中心とした回復に関する世界的な呼び掛け、雇用創出をともなう回復の達成、これらは本当に大事なことであって、この点について考えたことを私の経験から述べさせていただきます。

今、コロナ禍で本当に世界中が大変ですが、それと同じようなことが以前もあり、リーマンショック時も世界的な大不況が起きました。そのときに政府は速やかに政策をたてて、緊急雇用対策をたくさん打ちました。いまのコロナ禍はその時以上に大変な状況にあるのですが、私たちが一緒に学ぼうとしている人たちがどのような政策を求め、どのような政策に効果があるかを考えると、やはり雇用だと思います。雇用されているという保障と安心があって、はじめて学びたい学びがあり、安心して学べるのです。その点でいうと、たとえばリーマンショックのときは、雇用創出ということで、1年間、雇用を保障しながら訓練をするという事業がありました。つまり職業訓練の参加者に賃金が支払われたのです。その訓練事業も私たち情報の輪サービスは豊中市と協働で行ったのですが、その事業に参加されたシングルマザーさんたちは、1年間雇用されて安心して経済の不安を感じることなく、たとえ1年間といえども社会保険に加入しながら、仕事のスキルを学ぶことができました。その1年間で身につけたことが Reskilling / Upskilling になって、彼女たちの次の仕事に結びつきました。雇用を創出しながら訓練をするという事業の効果はきわめて高いと思います。政府はそのデータをしっかり持っていると思いますので、今こそ、この時代に、文字どおり雇用を創出する事業を設計していただきたいと思います。国や自治体がそういった事業の枠組みや骨組みをつくってくれば、それを引き受ける民間があり、当事者の Reskilling / Upskilling につながります。

政労使の三者の方々からコメントは、私はすごくうらやましいと思いながら聞いておりました。

このような政労使の対話の場があって、皆で話し合いながら、日本社会、経済、仕事の世界をどうしていくか考えておられて、政策や対策を打っておられるんですよね。だとしたらまさに、さきほど申し上げたような、賃金という所得保障付きの訓練、社会保障付きの訓練、安心した学びの機会を得るための雇用創出プランを立てていただきたい。筒井さんもご報告のなかで、すべての人に学ぶ権利があるとおっしゃっておられました。これは本当にそのとおりですが、抽象的な理念ではなく、具体的・現実的に考えると、よりいっそう脆弱であり、底辺にある人々が学ぶ機会を得るためには、訓練中の生活はどうするのか、お金の問題がつきまといまいます。誰もが学べる社会を権利として実現するためには、訓練に参加すること自体が雇用であって、賃金が支払われ、社会保険にも入れるという所得保障付きの訓練が不可欠です。実際にリーマンショックの際はそういった訓練が国の緊急雇用対策として提供されました。いまコロナ禍でもまさに求められている訓練だと思いますので、政労使の皆さん、よろしくお願いします。

司会 今日のテーマは技能開発と生涯学習ですけれども、その前提として、生活の不安がなくなることが必要ということですよ。生活の安心を確保すること、雇用を確保すること。技能開発や生涯学習という取り組みも、これらとともに両輪となって進んでいかないと成功しないのだろうと、お話を聞いていて私も強く感じました。

次の質問ですけれども、筒井さんにお聞きしたいことがあります。事前の申し込みのときに質問を受け付けたところ、何人かの方が書いてくださいました。今日これまでのご報告のなかで答えできた部分もあったと思うのですが、学生さんからの質問で、「コロナウイルスの状況下で労働に対して学生自身ができることは何か」というものがありました。「労働に対して」という、かなり広い言葉を使ってのご質問ですが、今日のシンポジウムには学生さんも参加してくださっているので、ぜひ筒井さんから何かお答えいただけますでしょうか。

筒井 コロナ禍の状況で労働に対して学生ができることは何か——。「就職」ではなくて「労働」という表現を使っているところがポイントでしょうか。今の若者たちが捉えている「働く世界」は、私たちが学生のころとは違うイメージなんだろうと、質問を聞いていて思いました。どこかに就職して雇われて働くということが当たり前ではなくなっていることを踏まえて、広く「労働」という言葉を使われているのかもしれませんが。そのことも踏まえて考えてみますと、雇われる働き方であろうと、そうでない働き方であろうと、どんな働き方をするにしても、スキルを再開発したり向上させていくことの必要性は同じです。では、ReskillingやUpskillingにお金を払うのは誰でしょうか。学生さんたち、若い皆さんは、「自分で出すしかない」「私費でやるしかない」と思いがちですが、決してそんなことはないのです。社会的なお金、公的な費用で、学ぶチャンスがあります。学校的なことを管轄しているのは、文部科学省だけではなくありません。厚生労働省でも職業訓練校という学校の組織を所管しています。民間の職業訓練や技能講習を利用するときにも、費用の助成があつたりします。いろいろと学ぶ機会や職業能力開発のチャンスや場は用意されているので、学生さんには、自分で全部お金をまかなう必要があると考えるのではなく、そういった情報を収集して、社会の制度や仕組みを学びながら、広くスキル形成に取り組んでいただければと思います。今すぐ答えられることとしては以上です。

司会 学生にとっては「生涯学習」と言われてもピンとこないかもしれませんが。でも学校を離れ

てからも学ぶ必要性は続いていきます。「学校教育」に関しては、機会の平等が大切と言われて、誰にとっても、つまり vulnerable な家庭で育っても、同じように学べる教育の環境が整えられなければならないということは広く浸透していると思いますが、「生涯学習」においてもそうなんです。こういった環境にあっても、何歳であっても、vulnerable な状況にあっても、同じように学べる機会が保障されなければならない。それが技能開発と生涯学習という ILO のメッセージだと思います。

佐々木さんにまた別の質問なのですが、今日のシンポジウムのテーマは COVID-19 後ということが最初に付いています。この1年半のコロナ危機のなかで、佐々木さんの実践、職業訓練や就労支援といった活動には、どのような影響があったのでしょうか。

佐々木 本当に想像もしていなかったことが起きたということで、正直、どう対応するのがいいのかわからないというのが1年半前の状況でした。私たちは自治体から訓練を委託されて、当事者の方と一緒に働きながら学ぶ訓練をしているわけですが、緊急事態宣言が出されて外出自粛という状況のときは、いったん訓練はお休みしました。私たちが経営しているのはコロナ禍で最も影響を受けた産業のひとつとされる飲食店です。ですがありがたいことに、その飲食店は訓練の場でもあって、自治体の委託を受けていますので、お店はクローズすることなく、地域の方々がいらっしゃる時間帯については、営業を続けることができました。

今日ご紹介した A さんにしても B さんにしても、コロナによって行き場がなくなったというのはすごくショッキングなことでした。毎日行く場所があるというのは、そのこと自体が支えであるという人たちがおられます。A さんは訓練がお休みになって、行き場がなくなって、自宅にこもるようになってから、外出制限が解除されてからも外に出ることができなくなり、もう一回復帰するのにずいぶんと時間がかかりました。B さんも本当に働く喜びを知ったというタイミングだったので、緊急事態宣言で行けなくなった、自分の居場所が奪われてしまった、あの場所がなくなったらどうしよう、これからずっと行けなくなったらどうしようと、すごく不安が高まったと本人から聞いています。そういった意味では、誰もが想像していなかったことが起こったわけです。これからまだ第6波があるかもしれないとなると、そのときに、一定の働くリズムをつかんだ人たちにどのような別の支援があるのか、私たち現場サイドでも考えていかないといけないと思っています。

話は変わりますが、先ほど筒井さんが学生さんの質問に対して、Reskilling や Upskilling にお金を払うのは誰か、という話をされました。自分でまかなうしかないと思いがちですが、さまざまな公的な支援を使っただけの学びがあるということ、私もお伝えしておきたいと思っています。たまたまですが、私たち情報の輪サービスは、今年、働きながら学んで次のキャリアステップを準備する「転職カフェ with School」という就労支援事業を行っています。これは政府の孤独・孤立対策として、厚生労働省が公募した「生活困窮者及びひきこもり支援に関する民間団体活動助成事業」に応募して採択された事業です。さまざまな分野のいろいろな活動に助成がついたのですが、私たちは、シングルマザーやシングル単身女性の就労支援事業を提案して実施することができました。そういった公的な支援を受けながら民間団体もさまざまな事業を行っています。ですが、せっかくいい制度があっても学ぶチャンスがあっても、その情報を必要とする人にどうやって届けるか。行政の公的支

援の窓口に協力を求めたり、民間同士の交流で広報にも力を入れても、なかなか情報を届けられないというもどかしさがあります。国がせっかく枠組みや骨組みをつくり、それに民間が手を挙げて、よい事業が生まれても、それが必要とされる人に届かなければ当初の目的は果たせないで、そういった点も課題です。

司会 このディスカッションのなかだけでも本当にいろいろな課題が見えてきました。残された時間がわずかになりましたので、シンポジウム全体を振り返って、まとめのコメントや言い足りなかったことなどをお二人からお話しいただいて、本日のシンポジウムを締めたいと思います。筒井さんからお願いいたします。

筒井 レディーさんの基調講演の最後のあたりに話されたと思うのですが、さまざまな政策や諸手段は、結合 integrate されなければいけないというお話がありました。政策や手段は結合されなければならない。つまり、Reskilling / Upskilling をきちんと体系化して誰もがその機会を得られるようにするためには、社会的な保護、経済的な支援、非経済的な支援、すべてと結合させなければならない。そうでないと効果が出ないということは繰り返し強調しておくべきところだと思います。誰もが Reskilling / Upskilling ができる社会になるためには所得保障とセットでなければならないといった「結合」が重要だということです。

佐々木 私も報告のなかでお伝えしましたが、このような事業は民間だけではとうていできません。国や自治体の役割は大きいということを強調したいと思います。レディーさんが最後にまとめとして六つの課題を挙げられましたが、その第一は「雇用創出のための投資を増やす」でした。この投資は民間だけではなく、国や自治体といった政府に対しても、公的な支出という投資を呼び掛けていると思います。政労使すべてが雇用創出のための投資を増やしていくことで、よりよい未来につながっていくのかなと思いますし、私たちは民間としてできることをやっています。

司会 ありがとうございます。これにて本日のシンポジウムを閉じたいと思います。オンライン上ではありましたが、ILO 本部からのビデオメッセージを含めて、今年の ILO 総会のテーマを日本社会の状況に即して考える有益な機会になったと思います。報告者の皆さま、ご参加の皆さま、ありがとうございました。